

Le  
Le



ばっ  
ば

7



ADULT  
ONLY

りりぬ、ぬ  
なな



# 目次

表紙	イラストレーション 流一本	
中扉	イラストレーション 流一本	
目次		2
電気羊の日常(こみつく)	流一本	3
自分らしさ(浩之&綾香)(SS)	白駒	15
セリオ(寝、シャツ、メイド)		
	(イラスト) くらうさぎ	24
奥付		



# 電気羊の 日常

お言いつけ通り  
改造を受けて  
まいりました

綾香さま…



ステキだわ  
セリオ



ただでさえ  
大きくて目立つ  
のに…



24時間勃起  
したまま  
なんて…



こんなに大きく  
させたらもう  
スカートなんかじゃ  
かくせないわね

勃起ペニス  
むきだして登校  
してみる？

満員電車に  
乗ったら一体  
何されちゃうの  
かしらね

頭の中で  
シミュレーション  
しちゃったのね

フッフ  
ますます  
硬くさせて

あゝ

あゝ







あれだけ射精してのに本当に収まらないのね

ハア

ハア

ギク

あ…  
だめ…です

今…

そんなに…  
刺激されたら

ギク

ギク

また…  
射精って…  
しまい…ます…

クワ

クワ

クワ



本当にいやらしい  
ペスね

あなたのこと  
どっちがHなの  
かしら…ねえ

マルチ♡

ハハ

フッ

あ…

あぁ

あ

あ…  
だめです

いっ…ん  
いっ…ん  
いっ…ん

ま…た…  
オチン…チン…  
おしりも…  
お●んこ…一緒に…

ググ

ググ

グググ

ググ

グググ

グググ

あぁ〜!!





グググ

ヌルル  
ヌルル  
ヌルル

あ〜...うう

ググ

ググ

ブル  
ブル

マルチのま●こに  
挿つたこの  
極太パイプを

グググ

セリオ

自分でおしりの穴  
広げてちょうだい♡

ググ

ほあ



さあセリオ  
あなたのペニスで  
マルチのま●こ肉を  
えぐりまわして  
あげて♡

あ…

はあ…

…はい

綾香様…

あ…ああ  
だめですう  
そんなの…  
挿ら…ない…

お  
あ

ごめん  
なさい  
…マルチさん

でも

私…

ズ  
ク  
ニ

ギ  
キ  
イ







ああん

ああん

あん

ボキ

ボキ

ズキ

あ

あ

あーっ♡

あーっ♡

あああん♡

ズキ

ズキ

ン

ハッ

ブル

ブル

なみ  
臆にたつぷり  
射精されちまったね

ハア

ハア

.....

ブル

ブル

ブル  
ブル

ブル  
ブル

もう...  
だめ...

今度は私を  
犯してえ♡

ハア

両方とも穴が  
ひらきっぱなしに  
なっちゃうくらい

二人の太つとい  
ち●ほでえぐって  
ほしいのお♡

ハア

たい  
い



ああん

ハア  
ハア

あぁー  
あぁあぁ

ズ  
ズ  
ズ

ズ  
ズ  
ズ

ズ  
ズ  
ズ  
ズ

ズ  
ズ  
ズ

ズ  
ズ  
ズ

いよあめ  
ひつばしなら  
でえ  
あり  
あり  
カリガ...  
のびきりさやう  
のお♡

あぁー  
いん...  
いん...  
いん...  
♡

綾香様

綾香♡  
♡







# 自分らしさ (浩之&綾香)

著者 白朧

カット 流一本

「今日は楽しい給料日♪」

放課後、小躍りしてしまいそうな、心情を平静に保ちつつ、気を抜くと、スキップまでしてしまいそうな両足を抑えて、下駄箱を出る。平静を保とうとしているが、口元は緩んでいた。

「学校は半ドンだし、一ヶ月働いたバイト代は入るし、人生の幸せをかみ締めてるって感じだね！」

羽がはえたように軽い足取りで校門をくぐると、予想もしない方から声を掛けられた。

「やっほー、浩之！」

いつもの明るい口調で手を振る綾香がいた。

「げっ！」

「『げっ！』とはずいぶんなご挨拶ねえ」

「なな、なんの用かなアヤカクン？」

「デートに誘いに来たのよ。浩之のおゴリで！」

『知っているのよ』って顔で誘いをかけてくるが、あくまでとぼけて置くことにする。

（確証はなにもあるまい、このままシラを斬り通す！）

「万年金欠のオレにたかろうってのか？」

「へえ、トボけちゃって」

「バイトの給料日ならまだだぞ」

バイトをしているのはバレているので、とりあえず、支給日でシラを斬っておこう。

「またまた、お・と・ぼ・け。時給七百八十円。労働時間四十時間。総

給与額三万二千二百円」

ズバリの明細を言い当てられる。

「ナニイ！ なんて、お前がそんな明細を知っているんだ！」

「ピンゴ！ ほら。この間、一度浩之がバイト中に食べに行ったじゃない。そのときに、店長が挨拶に来たのよ」

「何故、うぬに、店長殿が挨拶に参ったのだ？」

気が動転してるせいか、時代劇口調になってしまっていた。

「なに言ってるの？ あのファミレスは来栖川グループの傘下のなのよ。まあ、あの店長はたまたま私の顔を知っていたみたいだけど……。出世欲高いのねえ」

「あの店長。バイトの個人情報をも自分の出世のために売りやっがたのか！」

「まゝあね、私が浩之と知り合いだとわかったら、早速、情報を流してきたわ」

「そうだったのか……。どおりで途中からやけに気前よく昼飯とかおごってくれると思ったら……。下心かよ！」

「そ！ 一応、口止めしといたけどね」

「ぬう、人が汗水流して働いても、結局、来栖川の掌の上なのか……」

「そういうこと！、あきらめなさい♪」

まあ、どうせデート資金に使うつもりだったけど……。

「しよーがねー、付き合ってるわ。じゃ、このままだと何だから、一度帰って着替えてくるわ」

「そーね。じゃあ、一時に駅前がいい？」

「オッケー」

家に戻って着替えておく。待ち合わせは駅前に一時だったな。携帯で時間を確認しておく。

「充分に間に合うな」

念のため、綾香の携帯にメールを入れておこう。

『今から出る』

「送信っ」と

玄関で靴を履こうとしてる時にメールが返ってきた。内容を確認する。

『オッケー』

実に簡潔なメールである。芹香先輩とはえらい違いである。

なお、芹香先輩は、最近携帯を持ち始め、普段無口な反動なのか、メールはかなりの長文で返ってくる。しかも、半端じやない文字量のくせにものすごくレスが速いのだ。今では、携帯で文字入力している先輩の指が見えないほどの速さで動いているため、『見えない指（インビジブル・フィンガー）』と二つ名を賜っているくらいだ。命名オレ。

考えてる矢先に別のメール着信が来た。

芹香先輩からだ……。一抹の不安を感じさせるがメールを見てみることにする。

『浩之さん、たつたいま、何か良からぬ事を考えてませんか？』  
心が読めるのかあの人……。仮に読めたとしても、こんな距離が離れてるのに……。

続けて、メール着信。再度、芹香先輩から。

『綾香ちゃんとお出かけだそうですね。浩之さんを信じてますが、綾香ちゃんを泣かしたりしたら

呪いますよ』

背筋に冷たいものが流れる。

（一応、レスをしておこう、怖いから）

突発的なイベントがあったものの、待ち合わせに遅れることもなく駅前に到着。

『綾香は、まだみたいだな』

待ち合わせの時間まで、まだ少しあるな。

（む、目の前のゲーセンにロケテストのポップが貼ってあるな……）

本能の赴くままに、足が勝手に動き出していた。

『お待たせ、浩之』

待ち合わせ相手がバツトなタイミングで来てしまった。

『おう、綾香』

綾香はハイネックの白のセーターと黒のミニという装いだった。

『珍しいわね。浩之が待ち合わせに遅れずに来てるなんて。じゃあ、まず、何か食べない？』

『そ、そうだな、いくか……』

（グッバイ、ロケテスト……。明日もう一度来るぜ！ 待ってるよ！）

心の中で、明日、もう一度来るのを決心していた。

『わ、ねえねえ浩之。これ、綺麗じゃない？』

歩きはじめてすぐに、道端の露店に目をつける。小物を扱っている店だ。綺麗な石に穴を開けて、チェーンを通してある小物が並んでいた。

『なにに？ 願いを叶える石？ ……嘘くせえ！』

『え、願いを叶えるなんてロマンチックじゃない！』

さすがは、お嬢様。そんな腹も満たされない物件に興味を示すとはな……。

こつちは腹減って死にそうだと言うのに。しかも、こんなにインチキクさいものを……。

『いいか、願いを叶えるってのはな、世界中から七つの球を探して竜を呼び出すとか、聖杯をめぐって英霊を召還して最後に勝ち残るとかしなきや、願い叶わないんだぞ！』

『なによそれは！』

『聞いても判らないなら、説明しても判らないからいい』

じつじつと綾香の視線が突き刺さる。

『くっ！ しょうがねーな。いくらだ？ 千五百円？ 高ッ！』

『なによ、バイト代出たんでしょ？ いいじゃないこれくらい』

『来栖川のお嬢様がなに言ってるんだ？』

『浩之に買ってもらうのに意味があるんじゃないの』

『ぬ、しょうがねーなあ』

店番をしている、兄ちゃんに話し掛ける。

『兄ちゃん、コレ……』

『はい、千五百円ですね』

愛想よく、兄ちゃんが答えてくる。

『……もう少し、まからない？』

あきれた顔で綾香がツツコミを入れてくる。

『浩之……あなた、女の子に買うアクセサリを本人の目の前で値切



る？」

「少し黙っていなさい。綾香クン。コレは戦いなのだよ」

「うーん、お兄さん、彼女の前ではいいところ見せないと！」

早速、兄ちゃんが、先制攻撃を掛けてきた。が、この程度では怯んで  
いられない。反撃だ！

「いや、だって、この品物は全然加工されていないんじゃない？ コレで  
千五百円はちよつと高いよ」

まずは、軽く様子見。相手の反応で、原価の予想し、妥協点を探るの  
だ。

.....

戦いは、二十三分におよんだ。

結果、願いの叶う石（商品名） 千二十五円也。

「ほら、綾香」

買ったその場で綾香に手渡す。

「あ……、ありがと。でも、なんか凄く恥ずかしいんだけど……」

周りをみると、ギャラリイが出来ていた。オレと兄ちゃんのアツいパ  
トルに注目していたようだ。

綾香は、オレの手を引つ張りその場から撤退する。

「周りのアツい視線など、気にするとな綾香らしくない」

「注目されるのは慣れてるけど……、あんな視線は初めてよ！ 通る人  
がみんな物珍しげに見ていくんだもの」

あの程度で、恥ずかしがるとはまだまだだね。

「とりあえず、飯にしようぜ」

「そ、そーね」

最近出来たアミューズスペースの脇にあるファミレスに入る。ここは  
値段もお手ごろなのだ。来栖川系列だけだな！

「浩之、デザート頼んでいい？」

おススメセットを平らげたあと、にこやかな顔で言い放ってきた。

「まだ、食べるのか？ おススメセット、結構ボリュームあったら？  
この上デザートまで食べると太るんじゃないのか？」

「セクハラ発言ねえ。別腹よって言いたいところだけど、浩之とはカ  
リーの消費が違うのよ。大丈夫大丈夫」

で、一番高いヤツか……。

「ふう、ごちそうさま」

「さて、この後はどうするかな？」

「ねえ、ねえ、ちよつとここに行ってみない？」

「どこだよ」

パンフを片手に説明してくる。来栖川の店ばかりだが……。

「となりのパッティングセンター。長瀬主任がなんかアイデアを出し  
てるって聞いてるわよ」

「長瀬のおっさんがアイデアを？ 中々、怪しそうじゃないか？」

「そうね。ふふふ……」

「ふふふ……」

結局、パッティングセンターに行くことになった。

「そこだな、入るか」

「そうね」

中では、コースに分かれているようだ。オレ達は当然長瀬のおっさん  
がアイデアを出したというスペシャルコースにする。

『業界初！ 3D魔球システム』

などと書かれている。

「なんだ、この魔球システムってのは？」

最新3D技術を駆使した、バーチャルパッティングシステムと書いて  
ある。

『十球で一ゲーム。大回転魔球や分身魔球があなたを苦しめます』

あのおっさん、なんてマニアックなモノを作るんだ……。

「専用パットとヘッドセットを使ってバーチャルで作ってるのね？ 面  
白そうじゃない」

綾香は言ったそばから、コインを投入して中に入る。

（ちゃんと、外部モニターに映るようになってるのか……）

モニターには、綾香の様子が映っている。

カキーン！

もう打撃音が聞こえてくる。  
.....







そのまままで接してくれる浩之が一番好き」

「綾香……」

綾香の吐息が耳にかかる。

「健康な男にこんな事すると、押し倒されても文句いえねーぞ！」

「浩之になら、押し倒されても、いいかな……」

肩越しに、顔を上げる。俯いて見つめている綾香の視線と重なり合う。

自然と唇が重なった。

「ん……、んんっ……」

もう、火が点いた。

綾香の腕をとり、公園の端にある木陰に連れたいく。

「やだ、浩之。どこに……」

綾香の背中を木の幹に押し付けて、キスの続きを始める。

「綾香……」

「浩之い……んっ……」

エクストリームチャンプの綾香なら逃げ出す事も簡単なはず。逃げないって事はこの状況を受け入れてると解釈しておく。

「浩之……、んんっ……、こんなところで、しないで……ああんっ」

文句は、言わせないように、唇をふさいでおく。しかも激しく！

「んっ……んんっ……」

口内に舌を入れ、絡ませる。すぐに綾香の舌も積極的に動いてくる。

クチャビチャ

「はあ……ふあ……」

唇を放し、ミニスカートの中に顔をうずめる。秘所を覆う布の上から舌を這わていく。

「ひ、浩之い……」

「綾香……、こんなになってるぜ」

「あつ、だめ、そんな……あんっ、んんんっ」

「こんなに、濡らして、いやらしいな綾香は……」

「そんな……こと……」

「そんなことないのか？ じゃあ、見てみよう。綾香がいやらしいかどうか？」

言って、パンティを引きずり下ろす。

「へえ……」

「や……、見ないでえ……」

「どうして？ こんなにぐちゃぐちゃに濡れてるからか？ それとも、こんなにクリトリスを腫らしてるから？」

「はううっ……うう……ああ、いやあん……」

「抱きしめて、キスしただけでこんなになっちゃうんだ。舐めてやるよ……。ん……」

「いやあつ！ 浩之い」

綾香は、オレの頭を引き離そうとするが、体を抱え込んだオレは引き離せない。

ビチャビチャとわざと音をたてて舐め上げていく。

引き離そうとする綾香の力が緩んでいるので、セーターを捲り上げてブラジャーを露出させる。

「きや……」

ブラジャーの上からゆっくりと揉み始める。綾香は全身を熱く火照らせて荒息をついている。

「おっきいな……」

ポリウムも弾力も申し分ない。すぐにブラを捲り上げて直接揉み始める。左手はそのまま秘所を愛撫する。

「んっ……、浩之い……」

「いいんだろ？ 綾香。気持ちいいときは、ちゃんと言わなきゃな」

「んっ、んん……、はあつ、き……気持ち、いいの……あ、いやああ」

秘所から、愛液をたっぶり胸に塗りたくる。

「いただきます」

まずは右から、乳輪のまわりに塗りとった愛液を舐め取り、ちゅつと乳首を吸い上げる。次に左。

「いやいや、はずかしいよ」

秘所からはドンドン液が溢れてくる。

「ビショビショだな。じゃあ……」

後ろに回り、綾香のお尻を持ち上げて、いきなりプチ込む。

綾香の熱くぬめった粘膜が、ペニスの表面にびったりと隙間なく張りついてくる。

その粘膜を押し広げるように、オレはさっそくピストン運動をはじめ



る。

「あつ、あんつ、んんつ、あんつ、ああんつ」

オレは容赦なしに腰を動かしていき、肉棒と粘膜の奏でる淫らな音が、公園に響く。

「あ、ああッ、ん……くう」

公園なので声を出すまいとしているのか、唇を噛み、身体を強張らせている。

「綾香！ 気持ちいいんだろ？ もっと声を出せよ！」

より激しく腰を突き上げる。

「あつ……そんなこと、は、恥ずかしい……」

綾香の手を掴み、口から離させる。

「あつ、浩之……」

手を掴み、高み向かって激しくしていく。

「ああ、いや、イイよ。浩之！ もっと、もっと……」

「そうやって、声を出す綾香は可愛いよ……。う、もう……」

「イイよ。浩之。イって、私も……、イクっ、イツちゃう……」

「出るぞっ……綾香！」

「膣内にちようだい……。イクっ！ あ……」

「あやか……」

大量の精子が綾香の膣内に出される。繋がったまま余韻に浸る。

「はあ、はあ……。浩之のバカ……」

「バカってなんだよ。綾香が誘ったんだぞ」

「でも、こんなところが……」

「綾香がえっちなのが悪い」

「だって……」

イツた後の、昂揚した肌が、恥ずかしさでより色っぽく見える。その顔にすぐに息子は反応した。

「え？ ひろ……ゆき……？ ああつ、また……」

まだ、内部にある、ペニスの反応に気付いた綾香。

「わりい、綾香の顔が色っぽいもんで、また大きくなっちゃった」

「もう……」

体勢を入れ替えて、オレが地面に仰向けになり、綾香を上にする。

「やだあ……。こんなの……」

「オレは動かないから、綾香が動かして」

「え？ そ、そんな……」

腰を押さえているので、抜くことはできない。このままじっとしていれば、綾香は我慢できなくなるだろう。

「ん……ん……」

ゆっくりではあるが、腰を動かし始める。円を描くように……。

「気持ちいいか？」

「う……、うん。はあ……はあん」

「エクストリームの女王がこんな公園でセックスしてるなんて、誰かに見られたら大変だな」

「だって、浩之が……」

「じゃあ、やめるか？」

「え？ あ……、いやあ……」

「なにが、いやなんだ？」

答えを聞くまで、意地悪く、ピストン運動を止めておく。

「こんな、こ……、んな……ままじゃ、終われないよお……」

「しよーがなーなあ」

ピストン運動を再開して、綾香の動きに合わせて下から突き上げる。

「あうっ、そんな……ああ、深すぎるっ……あんつ、ああんつ」

「いいぞ、綾香の中は最高だ！」

鍛えているせいか綾香の中は絡みつくように肉棒を締め上げてくる。

二度目とはいえ長く持ちそうになかった。

「くうん、はっ、はっ、はあん！」

綾香もイキそうだ。このままリズムを合わせて……。

両手で胸をいじる。

「あつ、んはあああつ、あう、お願い、もっとゆっくり……んつ、はああんつ」

「こんなに乳首を勃たせて……、綾香は、いやらしいな」

いやらしく勃っている乳首を引っ張り、指で弾く。

「あんつ！ あつ、あああつ、私、もうっ……」

突き上げる動きも速くなる。どんどん欲望が込み上げてくる。

「イクっ、また……、イツちゃう。浩之……」

フェンスに手を付き、綾香がぐつと背中をそらせる。



「イクんだな？ 綾香、オレも……オレももうすぐだから……」

「あつ、ああつ……んくつ、浩之い」

「オレは高まる射精度に突き動かされて腰を振る。」

「あつ……んああああああつ」

「二度目とは思えないほどの量を放つ。」

「力が入らないのか、綾香は、折り重なるようにぐったりと体を預けてくる。」

「はあ……はあ……」

「意識してないのに、唇が重なる。」

「ん……、好きだよ、綾香……」

「ん……浩之……はああああ……」

「霞がかった目でオレを見て、綾香は長いため息をついた。」

「もう、このままじゃ帰れないじゃない」

「衣服を整えて、綾香が少し怒った口調で言ってくる。」

「じゃ、ウチでシャワー浴びていくか？ ここからならそんなに掛からんし」

「う……、それしかないわね。今日はもう変なことなしよ！」

「変じゃなきゃいいのか？」

「もう、えつちなこと禁止よ！」

「ええ……？（まあ、いいか……、どうせ乾燥機が故障中だからな……）」

「キツイ眼差しをオレに向けて問い詰めてくる。」

「なにか、良からぬ事、考えてない？」

「いえいえ、滅相もない」

「適当に返答をして、はぐらかしておこう。エプロン、Tシャツと浪漫」

「一杯に考えながら、家路に着く。」

「あつ……」

「突然、綾香が小さく驚きの声をあげる。」

「やだ、浩之のが……」

「綾香の足を見てみると、白っぽい液体で太腿が汚れていた。注入したばかりのオレの精液が垂れてきてしまったようだ。」

「綾香は頬を染めて名残惜しそうに、見つめている。オレはティッシュで拭き取ってやった。」

「また、いっぱい出してやるよ」

「拭き終えたあと、耳に息を吹きかけるように囁く。」

「もう……」

「綾香は、さらに真っ赤になっていく……」

終幕









リーフパーティーの本